

早苗とる 伏見の里に雨過ぎて
向かいの山に 雲ぞかかれる

(土御門院)

これは、桓武天皇の平安京遷都以前の都であった「長岡宮」のあった「向日」の地を詠んだ古歌である。

忠敬は、十七年間の全国測量の旅で、宿泊宅や神社寺院などで見聞した古歌を丹念に記録し、それを「測量日記」にしたためた。三十三測量地でメモした古歌七十九首が記述されている。また、安永七年(一七七八)五月二十八日から六月二十一日まで、妻のミチと奥州松島方面に旅行したときにつづった「奥州紀行」

潮音 風声

お夫 達
ま 間
く 久
さ 佐

に五首。寛政五年(一七九三)二月から六月にかけて、友人と一緒に伊勢・奈良・吉野などを旅行した時の紀行文「関西旅行記」には、二十一首の和歌や俳句が記されている。

古歌に忠敬が関心を持ったのは、父の出生宅である神保利右衛門家や親戚の平山藤右衛門家に、俳諧や詩文をたしなむ人がいたからだ。少年時代から壮年時代にかけて、知識や技能を深めている。

江戸時代の「向日町」は京の都から山陽道・山陰道の出入り口に位置していたので、向日山などは多くの歌人の題材となった。伊能測量隊も

古歌と忠敬

文化十一年(一八一四)二月十八日に、向日町の富永屋甚左衛門宅に宿泊している。筆者が向日市教育委員会に問い合わせたところ、富永屋家は現在も残っていて、庭などは近世の趣を伝えているとのことだった。向日町では、冒頭の古歌のほか、柿本人麻呂、紀貫之、藤原定家らが詠んだ十一首を書き留めている。

忠敬は文学少年であった。佐原の村役人のときに測量や地図作成の知識技能を学んだことが、江戸時代後期の先端的学問である天文暦学の道へと進ませたのだった。

(元伊能忠敬記念館長)